

第6章

2. 私たちにできる心のケア①

副読本
42～43ページ

年 組 番 氏名



読んでみよう

震災時、小学6年生だった子ども(女川町)が書いた手記です。

どこか違うよ、俺。

3月11日(金)

闇だ。まったくの闇。避難所は多少は明るくとも、俺の心の闇がはれることはなかった。これは夢だと思いたかった。無理だよ、こんな冗談じゃない……。明るい都合のいい未来しか考えられなかった。

3月18日(金)

あの日から一週間、一緒に暮らしていた家族とも再会でき、避難所の少しでも暮らしやすい所を求めて俺たちは住む所を転々とした。そしてなんとか一ヶ所に落ちついた。

8月13日(土)

この日は俺の誕生日で、また一歳年をとった。まさか、こんな状況で年をとるとは思わなかった。誰も思わなかっただろう。

10月28日(金)

文化祭が終わった。そのとき、俺ちょっと明るくなったんじゃないかと思った。文化祭でさまざまな人と関わって前より思ったことが言えるようになった。

11月2日(水)

このごろ、俺は家の手伝いができなくなった。なぜかどこからも家の手伝いをしようという気が起きなくなった。震災前はたくさんやっていたのに……。

11月9日(水)

俺は震災が起きてから少し変わった。中学生になったのもあるかもしれないけど、どこか違う。違うのにどこが違うのかわからない。けどこれだけはいえる。どこがちがうよ、俺。

(青志社発行「まげねっちゃん」より)

1

震災時、小学6年生だった子どもが書いた手記から、災害から月日が経過しても心の変化が見られます。なぜ、そのような思いになるのか、考えてみましょう。
